

晉侯嘉焉、授之以策曰、子豐有勞於晉國、余聞而弗忘、賜女州田、以昨乃饋、(昭三左伝)

春、伐邾伐絞、邾人愛其土、故賂之以漚沂之田、(哀二左伝)

子木暴虐於其私邑、(哀十六左伝)

宋皇縶之千縶、有友曰田丙、而奪其兄鄫般邑、以與之、(哀十八左伝)

(以下略)

(2) 周礼九夫爲井、四井爲邑、四邑爲丘、四丘爲甸計之法、而以丘計、古以家出賦、家有上中下三等之別、設丘邑之内、上家多則所出偏優、

下家多則所出偏困、惟以甸計之合五百二十家計之、則國內所出、亦略均矣、鄺國強族既多、各護其邑、容有上家反出少、下家反出多者、其不均則益甚矣、惟限以丘計、則檢察易精、而下家不至重困、(昭四左氏)

対句中に於ける語の情緒的価値

——詩人玉屑唐人句法を中心とする一考察——

谷川 英 則

一般に語は指示・喚情の兩機能を持ち、理知的価値と情緒的価値とを併有する。従つてその考察も亦この両面に互つてなさるべきであるが、語本来の機能が社会的約束に基づく指示を主とする為に、前者に比し後者の重要性に就いては從來述べられること極めて稀である。

注1小論はその点に就き、所謂「言語を素材とする芸術の科」としての文学に在つて、特に後者の比重の大なるべき詩を採り上げて、考察を運らさうとするものである。一見甚だ幼稚に似たこの問題は、実は極めて複雑であり、決して單純な抽象論や、形の上の公式論で、解決できるものではない。その追究には、老大な資料と、それを支へるに足る完全な方法が必要であり、そこには当然多くの困難が予想され

会箋)

(3) 鄺子皮將以幣行、子產曰、衷焉用幣、用幣必百兩、(昭十左伝)

夏齊侯將納公、命無受魯貨、申豐從女賈、以幣錦二兩、縛一如瑱而適齊師、謂子猶之人高齋、能貨子猶、爲高氏後、粟五千庾、高齋以錦示子猶、子猶欲之、齋曰、魯人買之、百兩一布、以道不通、先入幣財、(昭二十六左伝)

(以下略)

(4) 宣王喜文學遊說之士、自如騶衍、淳于髡、田駢、接子、慎到、環淵之徒七十六人、皆賜列第、爲上大夫、不治而議論、(史記田齊世家)

(5) 拙稿「商鞅、韓非の社會觀を通して見たる法家の二大流」(諸橋轍次先生古稀祝賀記念論文集) 参照

る。従つてここには、その大きな研究領域へのささやかな立脚点を求めることだけに終るのを覚悟の上で、唐詩中、特に詩的な部分である対句に含まれる語の価値分析を試みようと思ふ。

そこで、先ず材質の統一の為に、詩人玉屑卷三唐人句法中より例を取り、その中に用ひられた用言的實質語の情的機能上の關聯を考へてみることにする。資料として詩人玉屑を選んだ理由は、それが宋代に於ける詩評の蒐集として不可の無いもの、と見做しうると同時に、又ごく手近かでもあつたからである。編者魏慶之がどの様な規準でこれらの句を集めたかは遽かには知り得ないが、朝会・宮掖・懷古・送別・地名・人名・写景……と言つた項目下に、五言の対句八・七言の

対句二宛、採集されてゐるこれらは、一応唐詩の対句の典型を描へてゐるものと考へて良いであらう。

総計三一七句、そのうち、「二女竹上淚 湘妃水底魂」(25)注2以下の三十数句には、本稿の考察対象たる、用言的実質語の所在が、明瞭でない為、暫く除外し、残り二八〇句を整理すると、先ず、それらの対句は、(1)内容的に、上下句に似通つた表現を配し、その並列重複によつて、印象の強化を計る同質対と、(2)上下互に對蹠的な修辭を置き、その内容の落差の中に、對照比較の妙を求めようとする異質対との二つに、大別し得るであらう。今、後者に例を取つてみると、次の様な句の中で、用言的実質語の果す役割は、どの様なものであらうか。

i 御爐香焰暖 馳道玉聲寒 (6)

ii 孤城向水閉 獨鳥背人飛 (251)

iii 獨來成悵望 不去泥欄干 (313)

これらの句をみると、ここに附点によつて示した語が、上下句中に於いて、對稱位置に在り、また内容的にも、相對的關係に立つて、用ひられてゐることが、明らかであるが、それでは、その対応は、嚴密に言つて、何を基準としたものであらうか。寒暖は温度の高低差、去來は行動方向の相反を示すこと、言ふ迄も無いが、対句に用ひられてゐるこれらは、果して、それだけの意味で、使はれてゐるのであらうか。若しきうとすれば、これらの客觀的對比の中のどこに、言語技巧としての面白味が、求められるのであらうか。かうした疑問に対する解明の、手掛りを求める為には、やはり、語そのものの本質に遡る外は無く、ここに冒頭に述べた知的価値と情的価値との問題が、導入されるのである。

一般に、語が約束として、言ひ換へれば、理知的に、或る一定の客觀的意味を持つことは、間違ひないが、しかし、その約束を作り、その約束に従つて、これを使ふ我々は、実は知性によつて支へられる人

間であるより先に、感覺によつて生きる動物である。確かに、先人も指摘したやうに、注3我々の言語が、命題言語 (propositional language) であることは、明らかであるが、しかしそれは、その前に情動言語 (emotional language) であつたと言う過程を経て、始めてさう在り得たのであつて、いかに高度な象徴を示す抽象的言語であつても、その使用者が動物としての人間である限り、その象徴の中に情緒的要素を伴はずにはゐないと言ふことができるであらう。

すなはち、寒暖は、純粹な客觀的指示象徴としては、外界温度の高下による生物の皮膚感覺の相對的变化を意味するものであるが、實際に於いて、その變化の我々への投与は、さうした抽象的なものであるより先に、よりプリミティヴな何かである。その何かの解明は、若しそれが可能だとしても、恐らく何か自体の近似値と言ふにも程遠いものでしか無いであらう。なぜならば、それは完全に人間の内部の問題であつて、それ以外の場への抽出はもともと無意味だからである。それは確かに感情の世界と連なるものであるが、と言つて純粹な情緒と呼ぶには、少し誇張の嫌ひがある。それはどこまでも、知的価値の一部分であり、言はば指示が情緒に投じた波紋の知的領域への揺り返しとでも言ふべきであつて、飽く迄、象徴の内部を支へる要素としての粹を持つた情緒的価値に外ならない。従つて、その定義付けの曖昧さと正比的に、その構造の分析も漠然たるものでしかあり得ないのであつて、それは僅かに淡く二つの色合に區別できるに過ぎないであらう。若しこれを比喩的に表現するならば、それは我々の心の内側に、明と暗との差を齎すものであり、或は亦、死を前提とした人間の生に於いて、その生の方向に沿ふものと逆ふもの、すなはち死への近付きと距りを示す、といった相違である。命名は適當でないかもしれないが、今これを仮称して、陽性・陰性と呼ぶこととする。さうした時、先の對語は、いづれもこの二つの傾向の對立に依るものであることは

明らかである。例へば暖は寒に對して、より穏やかな明るい生の流れに乗るものであり、寒は暖に比べ、逆にその傾きに抵抗を示すものであらう。同様にして、対象にむかふ向は陽性、対象にそむく背は陰性、現れ来るものと消え去るものとの差を持つて来も又同断である。論は煩雜に互つたが、要之、対句中の対応語が、対偶を構成し得てゐる大きな要素には、かうした知的価値に伴ふ情的価値の介在することが、考へられるわけであつて、このことは「綉戸香風暖 紗窗曙色新」(14)の様な例を検討してゆけば、更に一層の裏付けを得られるであらう。思ふに、この句に於ける暖と新とは、知的には殆ど関連が無い。それにも拘らず、而語が対偶の興を示し得るのは、これらが情的に何等かの結び付きを持つからに外ならない。この暖と新との情的結合は、これを「人煙寒橘柚 秋色老梧桐」(59)に照合して観れば、極めて了然たるものとなる。新は古と對たり得、古は更に老に連なり、老は寒と並び、そして寒は暖の反である。この關係を辿れば、新が陽性語として暖と同質対を成してゐる面白味が理解できよう。

我々は、この様な知的には飛躍が有りながら、情的には同質と考へられる一連の語を、次に示すa・b・cの關聯のやうな操作によつて言はば尻取り循環の形で、組織的に求めることができる。

a 「玉節在紅清海怪 金函開詔拜夷王」(128)「簾捲青山巫峽曉 煙開碧樹渚宮秋」(108)「風傳鼓角霜侵戟 雲捲笙歌月上樓」(277)「碧霄傳鳳吹 旭日在龍旗」(3)

b 「山帶新晴雨 溪留閑月花」(244)「野花留寶曆 蔓草見羅裙」(20)「見鴈思鄉信 聞猿積淚痕」(225)

c 「文章舊價留鶯掖 桃李新陰在鯉庭」(248)

右の例に於けるaは、順に共通な語を媒介とすることによつて、在開―捲―伝の連鎖的同質性を示し、bも亦同様に帶―留―見―聞の聯関を現し、更にこのa bはcの留―在によつて、全部一つの系聯と

なる。かうした操作を重ねてゆくならば、その関連範囲は次第に拡大し、同質語の系聯も亦同時に伸延されるであらう。例へば「留連戲蝶時時舞 自在嬌鶯恰恰啼」(117)から、aの語群に連が加へられ、連は又「橋通小市家林近 山帶平湖野寺連」(258)によつて近と繋がり、近は更に「沙岸江村近 松門山寺深」(281)「夢裏君王近 宮中河漢高」(15)「山河扶繡戶 日月近雕梁」(169)の如く、深―高―扶と続き、その中の深だけを取つても「九江春水闊 三峽暮雨深」(32)の闊に延び、闊は「帆飛楚國風濤闊 馬渡藍關雨雪多」(178)の多に連なり、多は「楚水晚涼催客早 杜陵秋思傍蟬多」(227)の様に早と結ぶ、といった形で、情的同質語の語彙は、次第に積み上げられる。そしてこの語群系列の出発点とした在は、対象の現在顯在を指示し、先の来と同質、去と異質の対を做す注4ことから、これは情的陽性語たることが明らかであり、従つて以上の連鎖は、これを陽系聯と呼ぶことができる。今試みに、当面する資料の中に於ける、この陽性語群の一部を示すと、次の様である。

暖―多―深―高―闊―長―密―滿―近―靜―清―肅―閑―早―在―有―添―困―依―倚―處―向―接―合―和―連―兼―帶―留―來―臨―會―共―携―對―迎―含―銜―擁―宿―催―生―見―捲―開―得―尋―扶―進―拜―繞―蓋……

ここに挙げたものは、特に興を引く目ぼしいものだけであるが、全く同様にして、陰性語の系聯をも求めることができる。

寒―冷―稀―少―淺―低―下―短―疎―遠―遙―喧―暗―昏―遲―後―缺―盡―無―背―分―斷―隔―孤―散―獨―空―辭―去―離―送―殘―移―退―斜―窺―閑―關―流―沒―消―緩―迷―憂―怨―慘―轉―落―失―過―動―蔽……

これらはいづれも、比較的便宜上、なるべく互に対応する如く排列してみたものであるが、特にここで注意すべき点は、対偶句中に於い

ては、所謂反對語（知的に同一範疇内に在り、指示内容の方向だけが相反するもの）よりも、寧ろ根本的に類を異にし、僅に情的背反關係によつて、對をなしてゐるやうな距離の遠い語が圧倒的に多いと言ふことである。例へば、暖の對語は、常識的には寒又は冷たるべきであるが、實際には「旌旗日暖龍池動 宮殿風微燕雀高」(287)のやうに、凡そ暖とは縁の無さうな微と對をなす。しかしこの對照も亦、決して單純な恣意的付け合せではなく、「微月初三夜 新蟬第一聲」(112)の様な傍証によつて、先の暖・寒―老・古―新の繋合から、解き明かされる情的連鎖の一環であることを知る。同一系聯中に於ける相關、すなはち類語に就いても同様であつて、「風暖鳥聲碎 日高花影重」(134)のやうに配されるが、これも亦「影高羣木外 香滿一輪中」(71)「月明三峽曙 潮滿二江春」(189)のやうに、高・滿―明と連れば、暖との親近は漸く浮き出て来る。ここには暖寒の兩語を繞る例のみを、拾つてゐる感があるが、これは他のすべての語に等しく認められる現象であつて、例は枚挙に遑が無い。

ii の向は、背と對するよりも、「野廟向江春寂寂 斷碑無字草芊芊」(27)のやうに、異範疇の無と並ぶことによつて、句中に生かされ、同質對でも、「客帆和鴈落 霜葉向人飛」(193)のやうに、隔りの少なからぬ語と偶してゐる。

iii 来も亦、「野色寒來淺 人家亂後稀」(113)「無邊落木蕭蕭下 不盡長江滾滾來」(306)や「竹陰行處密 僧臘別來高」(239)「春潮帶雨晚來急 野渡無人舟自橫」(97)のやうな例を見せてゐる。すなはち、知的比重の大きな對語を用ひることは、必ずしも對偶技巧として優なる法ではなく、寧ろ指示としては、互に關連が無いやうに見えながら、実はそこに不可離な情緒の連繫の顯在する如き對句構成を求めることが、詩人鑢身のところであつたのであり、それ故にこそ、「闌闌開黃道 衣冠拜紫宸」(1)なる杜甫の句に對して、「黃閣開帷幄 丹墀拜冕旒」

(102)のやうな相似的表現が、生まれるわけであらう。前者を襲つた錢起の造句重心が、開一拜の巧みな呼応に置かれてゐることは、論ずる迄もない。異質對に就いても、例へば「弓抱關西月 旗翻渭北風」(40)「雲送關西雨 風傳渭北秋」(41)の如く、同じ作者岑參による極めて相近い修辭の中にあつて、互に呼応し合ふ對語の知的懸隔と情的親近との様相は、甚だ複雑であり、それだけに、又興味深いものである。今試みに、かうした微妙な關係のうち、比較的説き明かし易い一例を挙げると、知的には類似しながら、情的には相反する次の様な場合がある。

すなはち、「蓋海旗幢出 連天觀閣開」(125)と「雲蔽望鄉處 雨愁爲客心」(143)とに於ける蓋と蔽とは、いづれも掩也と解される語であつて、知的に極く近いが、對語として句中に用ひられた場合の兩者の間には、異質と言つて良い程の差が存在する。これは明らかに情緒的な面での對立であつて、連と並ぶ蓋は陽系列、愁と同じ蔽は陰系列に屬するものと言はねばならない。たとへば、あの「力拔山兮氣蓋世」(後下歌)と「浮雲蔽白日 遊子不顧返」(古詩十九首)との詩情の差の凝縮が、これらの語の情的相違なのであつて、客觀的動作としては、同じおほふことに違ひないが、その内部には、おほふものとおほはれるものとの關係に基づく、「おほひ方」「おほはれ方」の雲泥の懸隔があるわけである。一般に、知的評價の記載に止まる辭書に於いては、語の情的価値は殆ど問題にされず、所謂同義語として一括されるのが普通であるが、注5少くとも、詩中に於ける用語解釈に當つては、その情緒的機能を明確に捉へぬ限り、眞の理解は望み難く、時として詩意の歪曲をすら生じかねないであらう。

以上は、主として對句中の対応語の比較觀察から導き得た結論であるが、この問題は、必ずしもかうした對句という限定場面だけにみ考へられるものではない。例へば崔頭の七律「黃鶴樓」一つを採り上げて

も、各聯に於ける用言的實質語の情的価値を考へること無しに、果してこの詩の全容を把握することが可能であらうか。

昔人已乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不復返。

白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹。芳草萋萋鸚鵡洲。

日暮鄉關何處是。煙波江上使人愁。

起聯に、乘りて去ると言ひ、空しく余すと言ふのは、いづれも陰性に傾いた表現である。こゝに醸し出される鬱閉気は、決して強い明るいものではない。論は少し逸れるが、單に唐詩人のみに限らぬ通説として、芸術の分野に生命の充実を求める者の境位が、多く、背反し且合一する二つの立場、すなはち現実棄捐と理想憧憬とに、支へられるものであることは今更述べるまでもないが、特に唐詩に於いて、その底を流れる基本情調が、この世をば我が世と思ふ充足感の所産であると考へることは難しい。有唐三百年、若し大小の詩人たちが、それぞれに示した個性差を押しなべて見るならば、そこに共通な詩情として浮び上るものは、「何とはなしに感ぜられるものはかなさ」と言つたものではないだらうか。翻して言へば、この詩が「千古の絶唱」注6たる所以は、実にその唐詩の本質的情調を、最も良く具現してゐるからに外ならないであらう。登仙の黃鶴會て有りきとする好個の詩材は、現実の平板汚濁を嫌惡して、過ぎ去つたより良い昔への夢を謳はうとする詩人にとつて、見逃し得ぬものの筈である。と同時に、その夢とうつつとの烈しい落差は、当然、人の世の儚さへの諦観として、定着せざるを得なくなるであらう。この一篇の作品は、正にその典型を示して、余すところが無い。古の夢は去つて跡無く、僅にその形骸のみが空しく在る。この去・空の中に、仄示された起聯の主題は、頌聯に於いて、より明確に展開され、夢は再び返らず、すべてたゞ遙に遠い、と歎ひ継がれる。乗や余のやうな陽性語を伴つてゐた前聯の兩語を、更に強く「去つて返らず」「空しく悠たり」と陰性語によつて、

累疊的に表現し切り、現実に対する作者の否定的心情を、濃く打ち出してゐるのである。しかし実は、この様な陰性一辺倒は、「何処となくをつとりした感じが有る」注7べき唐詩に在つては、必ずしも妙とは言へず、ここに頌聯の即物的な陽性表現による、陰性中和が必要となる。……確かに夢は遠い。がしかし、さて今何も無いわけではなく、現に眼前には樹が茂り草が青い。この第三聯に於ける歴歴・萋萋は、すべて実況を肯定する陽性語に外ならず、具体といふことに異常な迄の偏執を示す中国人注8の心情に於いては、かうした穩やかな対句の挿入が、作品全体を支へる平衡感覚に、根本的な安定性を与へる因子となつてゐることは、明らかである。正に対する反、全部否定への抵抗としての一部肯定がここに試みられ、かくてそれらのすべては、終聯のさびさびとした詩情の中に、融け合つて行く。たそがれの岸に立ち、故郷いづこと求める作者の胸には、川面に罩める夕靄が蒼茫と流れ入るのである。あてど無い心の佗しさを「何れの処か是れ」と疑問に託し、一篇の余韻は愁の一語に結晶されて終る。清人の所謂「意得象先」、神行三語外、縱筆寫去、遂撞千古之奇注9なるこの詩の技巧無きに似た自然の技巧は、情的価値を十全に活かした用言的語彙の配置一つにも、明らかに窺ひ得るのではなからうか。このやうな中に在つて、いかに去や空の語の持つ情的価値の比重が大きいかは、後人の模倣作と較べる時、一層強く肯はれる。李白が黃鶴樓を経てこの詩を見、「眼前有景道不得、崔顥題詩在上頭」と歎じて、追和を断念した話は、余りにも有名であるが、この作に対する彼の傾倒ぶりは、並々ならぬものであつたやうで、遂に詩材を変へて、鸚鵡洲を詠んでゐる。格調詩趣、両つながら原詩との懸隔少なからぬものがあるが、ただ注意すべきことには、他の用語悉くを、意識的に換へてゐるにも拘らず、去のみは「鸚鵡西飛隴山去、芳洲之樹何青青」の如く、その儘襲用してゐる。更に金陵の鳳凰台に至つて、原作の完全な換骨

奪胎を試みた時、この傾向は一段と著しくなつてゐる。すなはち「鳳凰台上鳳凰遊 鳳去台空江自流」に始まつて「總爲浮雲能蔽日 長安不見使人愁」に終るこの詩には、新しい陰性語流・落・分・蔽等が登場して、自ら別趣を展開してゐるが、その基底に漂ふ情調は、やはり前詩と同じく、夢去つて空しい現実に対する遣る瀬ない愁ひに外ならない。同じ李白が「經三下邳圯橋懷張子房」詩の末尾に言ふところの「歎息此人去 蕭條徐泗空」も亦、同想異曲と称すべきであらう。

言ふまでもなく、これらの片々たる隻語を捕へて詩趣作意の全貌を知り得たとするのは、滑稽であるが、反面全く意味無しとして捨て去ることも誤りである。少くともこれらが、隠れて視難い氷山の一角を仄かながら示すものであることは、否定できない。とすれば、語の情的価値規定は、決して小さな問題では無くて、詩の内部に立ち入らうとする者凡ての、先ず触れねばならぬ課題たることが明らかであらう。

ただ冒頭に述べたやうに、この仕事は決して単純なものではない。その為には、唐詩中に於ける用語の情的価値体系を、より精密に測定し、漠然たる陰陽対立などと言ふ尺度を、一層的確なものに、変へねばならない。注10本稿は、その本格的作業以前の地固めであり、未だ例外の摘出、解析すら、なし得てゐない純然たる一試論に過ぎず、単なる問題提起に止まるものであることを述べて、寛恕を乞ふ次第である。

(一九五四・一)

注

- 1 「オグデン・リチャーズ」意味の意味・第七章美の意味」に少しく触れてゐる。
- 2 以下括弧（ ）内の番号はすべて引用句の原本内に於ける順序を示す。
- 3 「カッシーラー」人間・第一篇第三章動物的反応から人間の反応へ」参照。

4 例へば杜詩・胡爲來幕下祗含在舟中、李詩・美人在時花滿堂 美人去時餘空牀。

5 「楊雄・方言」の如き特殊な著作は例外。

6 「森槐南」唐詩選評釈・卷五」

7 「青木正児」支那文学概説・第三章詩字(三) 近体詩」

8 「中村元」東洋人の思维方法・第一部第三編第六節具象的形態に即した複雑多様性の愛好、等」参看。

9 「沈德潜」唐詩別裁集・卷十三」

10 例へば一つの仮説としては、以上の如く単に陰陽二つの色分けを試みるに止らず、用言的実質語の内部に於ける質的相違にまで觀察の深度を増せば、用言の持つ知的指示機能の三つの傾向、すなはち動作を示すもの、状態を表はすもの、及びその中間型、の差に応じて、反射的に情的価値にも喚情度の強弱、言ひ換へれば陽性陰性各情緒の醸成に對し直接的であるか間接的であるか、積極か消極かといった相違、の在り得ることが考へられないであらうか。この三段階は変化を基準とすれば変—漸変—不變—静止を単位とすれば破調—緩調—静とも言ふべき違ひであるが、それに應じて情的機能に強中弱の差が示されるのではないか、と思ふのである。先の本文の例iii去來は動作ii向背は半ば動作半ば状態i寒暖は状態を示すわけであるが、iよりもii、iiよりもiiiが陽陰の情緒喚起度が強いと仮説し得たならば、そこに亦新しい極めて興味有る考察が展開される。